

予算委員会 オープン委員会開催記録（概要）

- 【日 時】 令和5年12月17日（日）午後4時から午後5時31分まで
- 【参加者】 三神 尊志 委員長
齊藤 健一 副委員長
松本 翔 委員 出雲 圭子 委員 服部 剛 委員
大貫田鶴子 委員 石関 洋臣 委員 鳥羽 恵 委員
金子 昭代 委員 谷中 信人 委員 稲川 智美 委員
高子 景 委員 吉田 一郎 委員 新藤 信夫 委員
萩原 章弘 委員 西山 幸代 委員 土橋 勇司 委員
〔欠席者：秋山朋彦委員、川村準委員、青羽健仁委員〕

【場 所】 大宮区役所2階 大会議室

【テーマ】 若者が住み続けたいと思う魅力あるまちとするためには

【発表者】 弥谷 拓哉 氏、田口 彩葉 氏、坪木 健斗 氏

【内 容】

開会后、三神尊志委員長から挨拶の後、3名の発表者紹介、意見・提案の発表、意見交換へと移る。

発表内容と主な意見交換は以下のとおり。

(1) 発表者 (株)USA 弥谷 拓哉 氏

テーマ 「住みたくなる街、さいたま」

- テーマを考える前提条件として、「若者」を20歳代と仮定することとした。この仮定を設定した経緯としては、「若者」とは、学生なのか、社会人1年目の人間なのか、家族を持たれた30歳代なのか、どれをとっても若者という言葉でくくることができ、広すぎるので考えにくい。また、テーマ考える際に、私自身自分だったらどうだろうと考えるのが一番考えやすいのではないかと思ったため。
- 今回、問題提起が2つあり、1つ目が、まず若者が惹かれる、興味を持つ参加したくなるような施策を行う必要があること。2つ目は、何をしているのか、実は若者が知らないのではないかということ。
- 1つ目の若者が惹かれる施策について。最近「タイパ」、つまりタイムパフォーマンス

ス（時間対効果）という言葉が普及するほど時間がないと感じる人が多いと考えている。学業や仕事に時間を取られていると感じている人が多く、隙間時間の活用を重視する傾向があるように思う。例えば、隙間時間でできるアルバイトや学習アプリというものを多く目にするようになっている。

- 次に、お金がないと感じている人が多いのではないかと。ただ、利用する場面が多いものにはお金を使おうと考えている人も多く、多種多様なサブスクリプションの増加傾向が見られると思う。例えば、音楽、動画配信、また洋服のサブスクリプションというのもあり、それぞれの生活スタイルによって、利用する場面が多いものには、お金を使って登録するという人が多いように感じている。
- こうした生活の中で利用できる何かが必要なのではないかと思い、考えた1つ目が、主要な駅や公共施設に若者限定の無料ワークスペースを設置すること。若者限定（35歳以下）としたのは、前提条件の20歳代だけというのは、あまりにも利用者が少なくなってしまうため、35歳以下くらいだったら、利用する人の幅も増え、利用者数も増えるのではないかと考えたため。こうした無料ワークスペースに、20歳代のオーナーが運営しているカフェを併設すると、利用価値が少し増すのではないかと考えている。
- 2つ目は、月額制のワークスペースのサブスクリプション。こちらは誰でも利用できるワークスペースで、さいたま市在住の若者であれば、普通の人よりも少し安めに登録できるとし、また、この中にもさいたま市の人で運営しているカフェや飲食店を無料で利用できるというふうにすると、より利用者数が増えると思う。
- 次に、若者は市が何をしているか知らないという点で、若者にどう届けるかということについて。現代の若者の情報収集の特徴は、気になったらすぐに調べること。これはスマートフォンがあまりにも身近にあるので、少し気になったことがあれば、本当にすぐに調べることができる。ただ、逆に気にならなくても、目にする情報も多くなっているように感じている。これは、日々、SNSを利用する中で、勝手にお勧めとして出てくるような情報や、LINEを開いているところに出てくるニュースなどがある。しかし、その情報の中に政治や自分の住むさいたま市のニュースというのは、あまり含まれていないように感じている。そこで、若者が利用するSNSを市のニュース発信として存分に使うべきではないかと考える。
- 具体案として、さいたま市の情報発信を思い切って市民に任せてみてはどうか。権利の関係などで難しいところもあると思うが、例えば、さいたま市公認のSNSアカウントの利用権を一部市民、若者に譲渡してみる。若者向けのイベントの招待や、市営の施設の優待券等を配布した上で、そこを利用した若者に、SNSアカウントの要件

をその期間だけ譲渡して、若者が利用したらという生の声を、若者向けにバックしてもらおうと、より若者に届きやすい情報が生まれるのではないかと考える。

- この提案の問題点としては、1つ、施策を行うにあたっての予算がある。ワークスペースの設置や、活動する上での人件費というのは、全く予想ができないところであるが、何か大きな建物を建設しなければいけないというわけでもなく、今ある場所を有効に使うことも可能と考え、実現可能な範囲で提案した。問題点の2つ目は、お得感が行動原理となってしまうということ。提案している具体案の中でも、何かしら付随したサービスや、若者だったら安くなるとか、これをあげるからちょっとやってみてみたいな感じのものが行動原理になってしまうのではないかと考える。ただ、これもさいたま市に目を向ける導入の部分としては、仕方ない部分もあるとも考える。

◎主な意見交換

[出雲圭子委員]

さいたま市のSNSを活用するということについて、若者個人のSNSで、ハッシュタグさいたま市とか、若者の使うワードで使って、1つのアカウントではなく、いろんな人から飛んでいくほうが面白いのではないかと思っただが、どのように考えるか。

[弥谷拓哉氏]

インフルエンサーと呼ばれる方など、個人がそれを中心で活動していないと、なかなか個人のアカウントを使った投稿というのはやりにくいのではないか。例えば、私自身のSNSを使って投稿することももちろん可能だが、利用者の人たちは、私自身の他の投稿も見ることになってしまう。そうすると、また別のアカウントを作る必要があるため、それよりは、市の公式アカウントの方が良いのではないかと考える。

[齊藤健一委員]

サブスクリプションについて、若者が行政に求めるサブスクリプションには、どのようなものがあるか。

[弥谷拓哉氏]

さいたま市のカードを持っていると、そのカードを提示すれば、さいたま市が運営している施設、例えば盆栽美術館、鉄道博物館などの施設を少し安めに利用できるといったものが良いのではないか。どこか1つのサブスクリプションというよりは、さいたま市が運営している施設全体をサブスクリプションとして利用できるようなもの

が一番わかりやすいのではないかと考える。

〔高子景委員〕

SNSの発信に関して、例えばイベントなど、どういうジャンルの市政の情報を若者の声として投稿したら、今の若者たちにアルゴリズム的に一番届くと考えるか。

〔弥谷拓哉氏〕

若者が利用するようなものがあるという前提があり、例えば、けやき広場でイルミネーションをやっている。若者にとってはイルミネーションという単語は非常にヒットしやすいものだと考える。そういったところで、私自身も普段の生活の中で利用したいと感じるものは、さいたま市にもたくさんあるとは思う。そういった施設を中心に公式アカウントとして発信していくのが一番有効的であると考えている。

〔金子昭代委員〕

駅や公共施設に無料スペースを設置という提案について、弥谷さんがイメージされる公共施設はどのようなものがあるか。また、公共施設でこういうものがあつたらいいなと思うものはどのようなものか。

〔弥谷拓哉氏〕

最初に思いついたのが区役所や市役所。この具体案を考えたときは、駅だけでいいかなと思ったが、そのスペースを利用するために駅に行かなくてはいけないため、それでは家でやった方が良くということになる。例えば、学校から家に帰るまでの途中にある市役所の隣に何かあるとか、市役所の中で利用できるような、あとは図書館に併設でテレワークや会話ができるようなワークスペースがあると良いと考える。

(2) 発表者 さいたま市立浦和高等学校2年 田口 彩葉 氏

テーマ 「さいたま市名物〇〇を作って全国にアピールする」

「小さな子どもから大人まで利用できる施設をつくる」

- まず「魅力あるまち」とはどのようなまちのことかと考えてみた。日本で魅力あるまちといえば、世界一高いタワーである東京スカイツリーのある東京都や、清水寺など歴史を感じられる建造物が多くある京都府、食べ物で言うと博多ラーメンで有名な福岡県や、讃岐うどんで有名な香川県などがある。これらに共通することは、そのまちを代表するものがあることだと思う。
- さいたま市で有名なものといえば何があるか。浦和レッズや大宮アルディージャのサ

サッカーや、鉄道博物館、大宮盆栽美術館、さいたまスーパーアリーナ、ひな人形、うなぎ、そこから生まれたうなぎちゃんなどがある。サッカーは人気も実力もあるチームで全国でも知られている印象だが、博物館や美術館は利用者が限られてしまい、知名度はあるが、子供の間で人気という印象はあまりない。

- そこで、さいたま市を代表するものをつくり、全国に宣伝することで、さいたま市の魅力やよさをもっと多くの人に知ってもらい、若者がより住みたいと思うまちにしたいと考える。具体的な例として、食べ物やスイーツでさいたま市の名物をつくる。小さな子供から大人まで誰でも利用できる施設を造る。この2つについて説明したいと思う。
- まず、1つ目の「さいたま市の名物をつくる」について。さいたま市で有名な食べ物はうなぎだと思うが、高級な食べ物であり、あまり若者向けではないように思う。そのため、若者も買いやすい、食べやすい名物を作ることで、さいたま市をアピールしたい。名物をつくるという案にした理由は、食べ物なら小学生でも高校生でも大人でも年齢に関係なく興味を持てるジャンルだと考えたため。また、SNSを通じて情報を発信することで、さいたま市民だけでなく、全国の人にも認知されやすくなる。名物をつくるにあたって、市内の小中学生に案を出してもらったり、投票してもらうことで、小中学生に知ってもらいいい機会になると考える。自分も小学生のときに、オリンピックのキャラクターを選ぶときに、すごく話が盛り上がったものを覚えている。できた名物は宣伝、ポスターやウェブサイトなどで広め、販売する場所や店を作ると良いと考える。
- 2つ目の「小さな子供から大人まで誰でも利用できる施設を造る」について。さいたま市にはテーマパークがなく、海がない県の1つでもある。このため、テーマパークや遊園地、植物園、公園など若者向けでもある施設を造りたい。このような施設を造ることを提案した理由は、さいたま市は人口が多く、子供の割合も高いので、利用者が多いと考えたため。また、交通の便がよいさいたま市なら、他県からの利用者も見込めると思う。日本の有名なテーマパークとして、東京ディズニーランドやユニバーサルスタジオジャパン、富士急ハイランドなどがあるが、このような人気のある施設がさいたま市にも増えれば、さいたま市に誇りを持ったり、好きになってもらえ、そこから住み続けたいと考える人も多くなると考える。施設を作るにあたって、市民割をつくることで、市民も利用しやすくなり、施設によってイベントなどを開催すれば、若者にはより人気も出ると思う。さいたま市は交通の便がよく、綺麗な環境が整っているすばらしいまちだと思っており、若い人や全国の人にもっと魅力を知ってもら

ことで、より活気あるまちに成長していくと考える。

◎主な意見交換

〔服部剛委員〕

さいたま市にどのようなテーマパークがあるとよいと考えるか。

〔田口彩葉氏〕

高校生の視点でいうと、例えば、放課後にどこに行こうとなったときに、近くにコクーンがあるので、そこに行こうという感じにはなるので、放課後にちょっと寄れるような場所もいいかなと思う。また、さいたま市は、家庭を持った人も多くいると思うので、小さな子供も遊べるような施設、例としてディズニーランドを挙げたが、さいたま市の名前を売り出せるような施設があるとよいと考える。

〔大貫田鶴子委員〕

若い人たちは地理的にどのくらいの距離であれば行けるのか。

〔田口彩葉氏〕

駅から 20～30 分くらいは大丈夫と思う。

〔新藤信夫委員〕

テーマパークというと、広くてお金のかかった施設ということなり、大きな資本が入らないといけないが、若い人たちが求めているテーマパークは、小さな、身近なものでもよいのか。

〔田口彩葉氏〕

大きなテーマパークであれば、1つあればいいと思うが、例えば、さいたま新都心のけやき広場でイルミネーションをやっているが、そういった季節ごとに、ここでは特定でこれをやっているみたいなものもよいと考える。そういうところであれば、学校からも近く、放課後も行けるといいう人も多と思う。特定の期間や場所で、誰でも無料で行けて、写真を撮ったりできるようなところがあれば、中学生や高校生には人気になると思う。

〔稲川智美委員〕

高校生や大学生といった若い人たちの聖地巡礼のように、今まで行ったことのないところに行って、アニメの世界観を自分で体験できるようなところをさいたま市内の

どこかかにつくったり、テレビのロケ地があるということをもっと広めると、さいたま市も魅力があるんだと思ってもらえると考えるがどうか。

〔田口彩葉氏〕

修学旅行でシンガポールに行ったときに、友達が推しが行ったところだから同じところに行きたいと言っていて、そういうことをやっている若者は結構多いと思うので、そういうところを取り上げるのはよいと考える。

〔土橋勇司委員〕

さいたま市でみんなが知っている既存の食べ物を引っ張り上げていった方がいいのか、それとも新しいものをつくっていくほうがよいのか、どちらがうまくいくと思うか。

〔田口彩葉氏〕

新しいものをつくるほうがよいと考える。つくる過程で、小中学生に案を出してもらったり、投票してみたり、完成したもののポスターを募集してみたりとか、新しいものをつくることを広めることによって、それに興味を持つ人も多くなり、話題にもなると考える。

(3) 発表者 埼玉福祉医療保育製菓調理専門学校

リストラテオガワ 坪木 健斗 氏

テーマ 「夢を叶えられるまち」

- 若者たちで、若者たちが夢をかなえるような施設であったり、店舗を運営経営していくということが1つの目的である。背景としては、仕事をして、その後、現在、調理師を夢見て専門学校に通っている調理師専門学校の19歳、20歳といった若者たちと交流する機会が多くある中で、年齢が上で、経験もあるということで、多く頼られることなどもあり、改めてその20歳代後半から30歳代ぐらいからの視点としての意見となる。
- 具体的には、今、調理師の学校にいるため、周りの若者たちと話していると、やはり自分でいつかお店を持ちたい、こういったものを作りたいという話を多く聞くことがあり、でもそれだったら、こういう経験が必要だという相談をよくすることがある。実際に、自分はシェフのもとで修業しているが、やはりちょっと高い年代の方、そもそもプロとして何十年もやっている方に対して、質問などをするのがちょっと難しい、

憚られる、緊張するということは多くあると思う。

- そこで、集まった10歳代20歳代のお店をやりたい若者たちに対して、20歳代後半から30歳代の幾らか経験もあり、これからまたお店を開いていくような年代が、指導者、メンターの立場として、その若者たちに指導する。そして、20歳代、30歳代のほうも、教える、経営を学ぶという経験ができるといった施策を提案する。
- メリットとしては、大きく3つが考えられる。まずは、若者が住み続けたいという魅力あるまちとするためには、続けるということが大事かと思う。1回やって、ちょっと流行って、バズって終わりでは、定住という形にはならない。今は料理人という立場からの話であったが、夢は、販売業であったり、美容であったり何でも問わず、若者たちで経営していくことは可能と考える。
- 2つ目、続けるということが大切なため、最初、10歳代、20歳代からで、最初は制度として経営に関わっていたものが、数年、知識経験を蓄えて、今度はメンターとして指導の立場として入ることができるようになると思う。
- 3つ目としては、初期費用などが必要になるかと思うが、お店の経営であり、最終的には、自分たちでお店を回すことが終着点となるため、予算を別のものに使ったり、新しい夢の支援に回すことができるようになると思う。

◎主な意見交換

[松本翔委員]

岩槻区でイノベーションまちづくりというものが進んでおり、遊休不動産を活用するために、理解ある大家さんたちが、家賃の最初全部とか、本当に低額で事業を始めていいよという事業をやっていて、幾つかやり始めたというのがある。また、シェアキッチンが始まったりもしているが、こういったものについて、どのような支援があると良いと考えるか。

[坪木健斗氏]

やはり問題になってくるのはどうしても場所、店舗そのものをどうするかという話になるかと思うので、場所の確保。また、どんな夢になるかによって必要な設備も変わってくるかと思う。初期費用のあとは、どうしても若者同士で運営し、うまくいかないことも多くあるかと思うので保険であったり、あとはいずれ独立するということを目標にしていく中では、独立の支援があったりすると、自信を持ってしっかりとやっっていこうと思えるのではないか。

[谷中信人委員]

こういった声がどんどん届くといいなと思うが、やはり若者にとって政治とか行政は遠いと感じているか。

[坪木健斗氏]

なかなか自分たちで思ったことを伝える機会や、こういった話をする機会というのがないなと感じたので、今回応募したというところも非常に大きいと思う。やはり若者世代からすると、おそらく政治への興味や関心がやや薄く、当事者としての実感がないような部分も多くあるかと思う。その上で、社会人になってから思ったことであったり、こうして欲しいなっていうことを、どうやって伝えれば議会のほうに届くのか、なかなか知っている人がいなかったり、届かないと、もう諦めているような人のほうが多いのではないかというのは、正直思っているところ。

[鳥羽恵委員]

住む、暮らし、住み続けるということにどのようなイメージを持っているか。20歳代から30歳、40歳になっても、ここに住むということに、さいたま市は最適だと思うのか、こんな不自由では困ると思っているか。住み続けたいさいたま市であるためには、もっとこうだったら良いと感じていることがあるか。

[坪木健斗氏]

やはり年齢によって本当に求めているものは変わってくるかと思う。学校に通っている世代であれば放課後に集まれる場所、社会人になってからは、ひとり暮らしをするための住宅の支援が必要になってくる。家庭を持ったら今度は子供や自分の家など、また守るべきものも変わってくる。また、介護や、バリアフリーなど必要なものは大きく変わってくるかと思うので、それぞれに対して、ピンポイントで、それぞれのライフステージに応じた支援があると、本当に住みやすいと思うようになると思う。

[吉田一郎委員]

若者同士でやっている店からひとり立ちして、今度はそこで学んだ手法、技術を自分でやって続けていく、独立の転換期にはどういった支援があったらいいと考えるか。

[坪木健斗氏]

設備や初期投資への支援、またその継続に対しての支援というものがしっかりと、自分たちの夢をかなえるというところに対しては、非常に良いものになるんじゃない

ないかと考える。

◎傍聴人からの意見

[傍聴人]

3名の発表者と委員の方々はこんな話をしているんだと思って、大変勉強になった。坪木さんの話の中で、行政との距離が遠いというものがあり、私自身もすごくそれを感じてきたが、実はそんなにも遠くないということを今日まさに実感している。何でこんなに遠いのか思ったときに、やはり学校で何を学んできたかということがすごく大きかったと思っており、私が学校の何かを変えたかといっても何も変えていなくて、こちらから変えた経験があまりないので、そういった風土が学校の中に根付くといいのかなっということが一つある。

また、1歳の娘がいるが、どこが出かけるには基本は徒歩だが、やっぱりちょっと遠くに行きたいので、先日電動自転車を買った。ぜひ、電動自転車の補助を広げて欲しい。同時に、道路を広くして欲しい。

最後に、子育てをしていると、あいぱれっとは最強であるが、住んでいる見沼区からは非常に遠いので、あいぱれっとのような最高の施設が各区にあったら良いなということを提案したい。

[傍聴人]

浦和の高校生の田口さんの話でテーマパークというものが出たが、すごくいいアイデアで、若者の思いを、こういった市議会が主催したテーマで発表できるということが、とても貴重だと感じた。

無駄で何事も形が生まれないのではないかと思える議論の場も、こうして市議会の主催で定期的に行っていく、その中で、1つでもきらっと光る部分が見つかれば、良いのではないかと考えている。

若い人にも地域を思う気持ちがこんなにあるんだなということがすごくよく分かり良かった。

最後に、江原大輔委議長及び斉藤健一副委員長から挨拶があり、委員会は終了となる。